2016年8月5日　号外

JSSH NEWS
日手会ニュース

発行：一般社団法人日本手外科学会
広報・渉外委員会

日本手外科学会 理事長に就任して

理事長　矢　島　弘　嗣

目　次

●理事長に就任して
●副理事長に就任して
●理事に就任して
●新名誉会員のご挨拶
●新特別会員のご挨拶
●物故会員への追悼文
故 津下健哉先生を偲んで
故 児島忠雄先生を偲んで
故 Alfred B. Swanson先生を偲んで
●平成28年度 各種委員会委員
●監事紹介
●教育研修会のお知らせ
●関連学会･研究会のお知らせ
●編集後記

この度、平成28年4月20日に開催されました定時総会におきまして理事に選任され、直後の臨時理事会で2期目の理事長に選出されました市立奈良病院の矢島でございます。この2年間、11名の理事並びに2名の監事の先生方の協力を得て何とかこなしてきたつもりですが、おそらく積み残した課題が多くあったことから、「もう1期頑張れ」という皆様の声援で理事長を続けさせていただくものと考えております。今回も粉骨砕身の覚悟で日本手外科学会の発展のために尽くす所存です。どうか会員の先生方にはご協力、ご指導のほど、宜しくお願い申し上げます。

さて、今回は皆様のご協力とご理解のもと、選挙が行われず理事、監事が決定いたしました。選挙を否定するのではありませんが、前回の選挙では後に多くの問題が発生したことは事実です。今回はその労力をしっかりと専門医の準備に充てたいと考えております。前号の日手会ニュースに書きましたが、subspecialtyとしての日手会は(旧)日本専門医評価認定機構が認めたものであり、現在の日本専門医機構から再認定を受ける必要があります。この秋に認定されなければ今までの苦労が水の泡と化します。そのために本学会は、「専門医制度整備指針2014」に沿うような形で専門医制度、研修プログラムの変更を行わなければなりません。現在専門医制度委員会を中心にその準備を始めております。そのために手外科認定研修施設における手術の種類と数を集約し、ヒアリングの際に機構の担当理事に答えなければなりません。またこのデータは新たな手外科プログラムの作成や、研修施設の整備を図る上でも重要です。各認定施設に対して昨年1年間の手術数の提出をお願いし、認定施設として新プログラムに組み込まれるためには必須ですので、必ず提出していただきますよ

うお願い申し上げます。

また、今年はASSHにおいて日本手外科学会がGuest Societyに選ばれております。こちらの準備も国際委員会が中心となって現在進めております。できれば多くの会員の先生方の出席をお願いできればと思っております。その他、広告可能専門医の獲得、代議員選挙制度の改革、研修単位登録システムの再構築、別冊Hand Nowの刊行など、進めなければならない事業が山積みです。これらの事業を確立するためには、皆様からの応援と協力が必須と考えております。会員のための素晴らしい日本手外科学会を確立するため、でき得る限りの覚悟で臨むつもりですので、温かいご支援をよろしくお願い致します。

副理事長に就任して

副理事長　三　上　容　司
(財務委員会、Web登録委員会担当)

この度、平成28年4月20日に開催されました「一般社団法人 日本手外科学会」定時総会において理事に選出され、同日開催された臨時理事会において副理事長を拝命いたしました三上容司です。前期に引き続いての副理事長拝命となりましたが、会員の皆様のご協力を得て、矢島弘嗣理事長を支えながら日手会の発展に尽力いたしたく存じます。どうぞよろしくお願い申し上げます。

さて、日手会が一般社団法人に移行してまる6年が経過しました。6年を経て、一般社団法人としての運営もようやく落ち着いてきました。振り返りますと、平成22年に 一般社団法人に移行した際、当時の佐々木孝理事長が掲げられた目標は、1. 健全な財務運営、2. 広告のできる専門医を目指す、3. 日本医学会加盟、4.標榜科としての手外科を目指す、5. 研修単位登録システムの再構築、6. Web会議の導入、7. 症例登録への筋道の策定でした。これらの中のいくつかはすでに実現されました。平成23年には日本医学会に加盟できましたし、研修単位登録も本人管理から学会管理へと変わりました。Web会議も広く行われるようになりました。また、財務委員会の創設により財政規律の保持が図られ、一定の成果が得られました。現時点で残された課題のうち、広告可能な専門医、症例登録などは新専門医制度に密接に関わる課題であり、標榜科はさらにその先に目指すべき課題と思われます。

手外科得専門医は、日本専門医機構により整形外科と形成外科を基盤とする2階建て部分のsubspecialtyとして認められましたが、最近(平成28年6月時点)、平成29年4月に開始される予定であった基本領域の専門研修が延期される可能性がでてきました。現在、新専門医制度への移行自体も不透明な状況ですが、手外科学会としてはあらゆる状況を想定しつつ、新専門医制度下でのsubspecialty専門研修の準備を進めなければなりません。また、最終的には手外科が標榜科となることを目指すべきと考えています。

種々の課題がありますが、いずれも従前にも増してスピーディーな対応を求められています。矢島理事長を補佐しつつ、理事、監事、会員の皆様のご協力を得て、これらの課題の解決に向けて取り組んでいく所存です。今後とも、温かいご指導ご支援のほど、よろしくお願い申し上げます。

◇◇

副理事長　**田　中　克　己**
（カリキュラム委員会担当）

この度、一般社団法人日本手外科学会の平成28年度の副理事長を拝命いたしました田中克己でございます。本年4月の定時総会で理事の承認をいただき、その後の臨時理事会で矢島弘嗣理事長より指名をいただきました。たいへん光栄なことであるとともに身の引き締まる思いです。三上容司副理事長とともに理事長を支え、理事、代議員ならびに会員の方々の架け橋となり、学会運営に寄与する所存です。よろしくお願い申し上げます。

具体的にはカリキュラム委員会の担当理事と、ここ数年携わっております専門医制度委員会の委員長を併任することになりました。いずれも新専門医に関する業務であり、たいへん難しい時期にさしかかっておりますので、多方面からのご意見を聞きながら、より良い方向性が見出せるように努めてまいります。平成24･25年度に1期2年副理事長を務めましたが、その時期は日本医学会に加盟した直後で、また、旧制度下でのサブスペシャルティ領域の専門医として正式に認定されたばかりの頃です。

現在、日本手外科学会において喫緊の課題は新制度下での専門医制度の確立にあります。この原稿を書いている今でもまだ、基盤学会である整形外科ならびに形成外科の基本領域としての専門医制度の最終決定には至っていません。このような時期ではありますが、手外科の新専門医制度の確立は急務と考えています。まずは今秋の更新を迎え、さらには、平成33年度（2021年）からの新制度下の手外科研修の具体的な内容に着手することが必要となります。そのために、すでに全研修施設に対して昨年一年間の手外科手術の全例調査をお願いしております。この調査は研修施設数、専攻医の募集人数、経験症例数などを決定する上での重要な基礎データとして使用させていただきますので、関係の皆様方のご理解とご協力をお願い申し上げる次第です。

このように手外科の新専門医制度は手外科医を目指す若い医師の獲得･育成を行ううえでたいへん重要なことでありますが、同時に良質で、安全な手外科の医療を国民に提供し、さらに社会に認知されるためのものでもあります。そのためにも私自身、この2年間は手外科の専門医制度が盤石なものとなるように覚悟を持って臨む所存です。

矢島理事長のもと、三上副理事長および理事、代議員の方々とともに、これまで先輩方の築かれた日本手外科学会のさらなる発展に尽力する所存です。会員の皆様には、今後とも一層のご指導ならびにご支援をお願い申しあげます。

理事に就任して

池　上　博　泰
（情報システム委員会、社会保険等委員会、人工手関節ガイドライン策定委員会担当）

2016年4月に開催された代議員会総会において、2期目の一般社団法人日本手外科学会理事に選出していただき、ありがとうございました。大変光栄に思うと同時に、責任の重大さを痛感しております。もとより微力ではありますが、少しでも会員の皆様のお役に立てるよう全力を尽くす所存ですので、何卒よろしくお願いいたします。

私は1985年に慶應義塾大学医学部を卒業し、卒後3年目の平塚市民病院出向中に石黒先生のご指導のもと手外科に興味を持ち、慶大手の外科グループに加えていただきました。2012年4月に慶應義塾大学から東邦大学に異動し、現在、東邦大学医学部整形外科学講座（大橋）に勤務しております。

今回、本学会理事として、1期目に引き続き情報システム委員会と社会保険等委員会担当を拝命し、さらに人工手関節ガイドライン策定委員会担当も拝命しました。

学会の将来を担う情報システムの構築は、コストパフォーマンスも含めてとても重要です。今までの経緯、将来性、日本整形外科学会・日本形成外科学会との連携を考慮して活動していきたいと思っています。また手外科分野の診療報酬点数は、脊椎外科などと比べると、その技術がまだ十分には評価されていません。ただ、2016年の診療報酬改定に際しては、社会保険等委員会の亀山委員長をはじめ各委員の活動のおかげで、だいぶ点数が改善されました。人工手関節ガイドライン策定委員会については委員長も兼ねていますが、すでに委員会内部ではガイドライン（案）もでき、理事会の承認を得られれば完成となります。幸いにも私は、日本整形外科学会の情報システム委員会委員、社会保険等委員会委員であり、また東京都社会保険診療報酬請求書審査委員会審査委員でもあります。さらに日本整形外科学会でガイドラインを作成してから認可を受けたリバース型人工肩関節について、その適正使用のために実際に活動を行っている日本肩関節学会リバース型人工肩関節運用委員会委員でもあります。日本整形外科学会、日本形成外科学会とうまく協調して、日本手外科学会のために、積極的に活動していきたいと考えています。

会員の皆様におかれましては、何かお気づきの点や要望などがありましたら、学会事務局にご連絡いただけたらと思います。

本学会は会員数も増え、法人化や専門医制度の開始により、さらに充実してますます発展すると思います。そのような中で、特に若い会員にとって魅力ある学会になるよう努力することが私の責務かと考えております。理事長の矢島先生を支え、明るい未来のある学会を目指して参りたいと存じますので、会員皆様の温かいご理解とご支援をお願いいたします。

稲　垣　克　記

（機能評価委員会、専門医制度委員会担当）

日本医学会の分科会である日本整形外科学会と日本形成外科学会の基盤学会から一般社団法人日本手外科学会は新しく専門医制度が誕生しました。私たちはこれを遵守するとともに整形外科医と形成外科医がお互いに理解し合い協力しあって進むべきであると思います。本学会専門医制度の維持と発展のため、この2年間私は専門医制度委員会担当と機能評価委員会担当の理事として本学会に力を注いできました。これからさらに日手会の社会的地位を大きく前進していかなければいけません。教室を主催する整形外科医師として本学会の母体法人である公益社団法人日本整形外科学会との連携も進めて行かなければ行けない課題です。これからの2年間は新専門医制度に向けてレベルの高い洗練された手外科サブスペシャルティーの制度の確立に向けて矢島弘嗣理事長体制のもと本学会の発展のために尽力したいと考えます。

どうぞ宜しくお願いいたします。

柿　木　良　介

（国際委員会、定款等検討委員会担当）

この度日本手外科学会理事を拝命しました近畿大学医学部整形外科の柿木良介です。私の理事就任をお認め頂きました、日本手外科学会会員の皆様、矢島理事長に深く御礼申し上げます。

私には、理事としての抱負が3つあります。

まず日本手外科学会会員の国際化への強化です。今回私は、矢島理事長より国際委員会担当理事をも拝命致しました。私が、京都大学在職中、海外からたくさんの有名な手外科医が京都を訪問され、地元ということで、その京都案内の依頼を受け、親睦を深めて参りました。そういう理由で、国際員会担当理事は、私にとって念願の役職でありました。今までの関係を活かして、日本の若い手外科医の国際進出に協力して行きたいと考えています。

2つめは、手外科手術の保健診療の改善です。手外科医には、細かい解剖や複雑な運動生理の理解、マイクロサージャリーを含めた繊細な手術手技の習得が要求され、その習得にも他分野と比較すれば長い時間がかかります。ただそれだけ時間をかけて習得した手の外科手術に対する診療報酬は、決して手外科医がその習得に費やした労力に見合うものとは思えません。私は、理事である間、少しでも手外科医の待遇が改善されるよう、理事会で理事長、担当理事の先生方と協力して、近い将来手外科医が、その費やした労力に見合う手外科診療報酬を獲得できるよう、努力したいと考えています。

3つめは、整形外科、形成外科の垣根を取り払った手外科医の養成です。

私は、日本マイクロサージャリー学会でも役員をさせていただき、2014年には学会長もさせて頂きました。日本マイクロサージャリー学会も日本手外科学会同様、整形外科、形成外科から成り立っています。学術集会の運営に関しては、たくさんの形成外科医の先生のご協力、ご援助を頂き、会を成功させることが出来ました。またあたらしい手外科学会専門医プログラムでは、整形外科出身者

には形成外科での手外科教育を、形成外科出身者には整形外科での教育を、一定期間受けることの義務化が考えられています。整形外科、形成外科の垣根を超えた大局的立場で、手の外科のますますの発展に貢献していきたいと思います。

最後に日本手外科学会の皆様の忌憚のないご意見をお待ち致しております。出来る限りご希望にそえるよう矢島理事長はじめ、理事会一丸となって皆様と日本手外科学会の為に頑張ります。宜しくお願い申し上げます。

加　藤　博　之

（専門医試験委員会、用語委員会担当）

私が理事を務めるのは2回目になりますが、前回は2008年からの2期4年間で、その期間に教育研修カリキュラム委員会、専門医試験委員会、カリキュラム委員会の担当理事として手外科専門医制度、専門医の発足に携わる機会を与えて頂きました。現在、日本専門医機構により整形外科や形成外科などの基本診療科において専門医制度プログラムの申請、募集が始まろうとしております。その後、日本手外科学会などのsubspecialty診療科の専門医制度の見直しに着手されると思われます。これまでの日本手外科学会の努力を無にすることなく、国民に理解を得る、信頼できる手外科専門医制度の継続、発展に努める必要があります。私が理事として最も力を入れて臨む仕事としては、新専門医制度下におけるsubspecialtyとしての手外科専門医の確立と考えております。

担当する手外科専門医試験委員会は、立ち上げから10年以上連続して委員、委員長、理事などを担当しております。より公正な透明性のある専門医試験の実施に努めたいと思います。新たに担当する用語委員会においては、用語のweb掲載に向けて業務を推進してまいりたいと思います。

私は1985年に手外科を志して以来、石井清一札幌医大名誉教授、薄井正道札幌医大元助教授、荻野利彦山形大学整形外科前教授、三浪明男北海道大学名誉教授の諸先生より手外科の指導を受け、北海道大学で10年間手外科の研修、研究に携わりました。同時に釧路労災病院、名寄市立病院、国立療養所西札幌病院などの病院で通算8年間整形外科医長として臨床診療を担当して参りました。2003年からの13年間は信州大学整形教授として手外科専門医を育てております。手外科の分野では、腱損傷、末梢神経損傷と障害、先天異常、肘関節と前腕の外傷、高齢者の変性疾患を中心に手術・研究に研鑽し、現在まで147編の英文論文を発表して参りました。これらの臨床診療と研究の経験から、日手会における手外科の基礎・臨床研究を促進し、日手会の国際的研究レベルアップと若手研究者の育成に貢献したいと存じます。

会員の皆様には、どうぞご協力をお願いいたします。

亀井　譲

（先天異常委員会、専門医資格認定委員会）

この度、平成28年度理事に就任しました名古屋大学大学院医学系研究科機能構築医学専攻運動・形態外科学講座、形成外科学教授亀井譲です。日本手外科学会の皆様に謹んでご挨拶を申し上げます。

私は、昭和59年に名古屋大学医学部を卒業し、厚生連加茂病院（現豊田厚生病院）、静岡済生会総合病院にて外科研修をした後、平成元年7月に名古屋大学形成外科教室に入局させていただきました。組織移植の面白さ、マイクロサージャリーの奥の深さに興味を持ちこれが私のlife workとなりました。平成5年には愛知医科大学形成外科に赴任し、四肢熱傷後の瘢痕拘縮に対する形成術や、切断指の手術を行ってきました。その間、テキサスのMD Anderson Cancer Centerの形成外科に短期留学をさせていただき、頭頸部再建、乳房再建、さらには内視鏡手術を中心に勉強させていただきました。平成6年9月には岐阜県立多治見病院に赴任し、外傷をはじめ一般病院における形成外科診療を経験させていただき、平成10年4月に形成外科講師として、名古屋大学医学部形成外科学教室に戻ってまいりました。大学に帰局してからは、各種領域における再建術、特にマイクロサージャリーを利用した遊離皮弁移植をより安全に行うべく、移植床血管の求め方について工夫をしてきました。特に下腿における外傷後の再建では、大網を利用することで、これまで80%の成功率であったマイクロサージャリーを90%以上の成功率に成績を向上させてきました。また、腹部外科の経験を生かし、腹腔内組織による再建術、特に大網を利用した新しい再建術や研究を行い、現在も教室のメインテーマの一つになっております。

現在、新しい専門医機構により基本診療科の専門医制度が確立されつつあります。日本手外科学会においても、整形外科学会と形成外科学会の二階建ての学会として、新しい専門医機構のもと、専門医制度を確立させる必要があります。この2年間で、研修体制、研修基幹病院、そして専門医更新制度などを整備して、手外科学会にとって有用な制度づくりに寄与したいと思っております。もとより浅学非才の身ではありますが、日本手外科学会発展のために全身全霊で献身していく所存でありますので、今後とも諸先生方には温かいご支援と、ご指導ご鞭撻を賜りますようよろしくお願い申し上げます。

酒井昭典

（倫理利益相反委員会、学術研究プロジェクト委員会担当）

この度、伝統ある日本手外科学会の理事を拝命いたしました。大変光栄に存じますとともに、重責を果たすべく全力で取り組む所存でございます。私は、産業医科大学整形外科初代教授の鈴木勝己先生のもとで手外科を研修し、鈴木先生が会長を担当された第32回日本手外科学会学術集会（平成元年、大学内ラマツィーニホールで開催）を裏方として経験することができました。ここで、多くの魅力的な発表と講演を拝聴し、学会運営の実務にも携わったことが、手外科を専門とする大きなきっかけになりました。

平成10年に評議員（現、代議員）を拝命して以来、用語委員会、編集委員会、教育研修カリキュラム委員会（現、教育研修委員会、カリキュラム委員会）、専門医試験委員会、オンラインジャーナル別冊運用委員会等のメンバーとして学会実務を担当し、学会の現状や今後の課題を考える貴重な機会をいただきました。これからは、手外科を専門とする大学整形外科主任教授という立場で、理事として大きく3つの課題に取り組みたいと考えています。

1つは、新専門医制度における2階建て専門医としての「手外科専門医」を円滑に確立することです。新しい制度への移行で混乱が予測されますが、大学間・病院間の連携を密にとって多くの問題を解決していきたいと思っています。

2つめは、優れた後進の育成です。門戸を広げて、手外科の魅力をアピールしていきたいと思います。当大学で行っている解剖献体を用いた手外科手術手技研修や地域で開催しているセミナーを通じて後進を教育していきたいと思います。手外科の専門性・特殊性を大切にしながらも、グローバルな視点から手外科を捉え、多くの関連領域を取り込む学問的寛容さを大切にし、手外科医を志望する若手を増やしていきたいと思っています。

3つめは、手外科領域におけるビッグデータの解析です。「手外科」をサイエンスとして大きく発展させるためには、技を磨く臨床経験とともにその根拠となる科学的データの蓄積が重要です。大学の枠を超えて多施設共同研究を行い、科学的エビデンスの構築に努めたいと思っています。

このような考えをもって日本手外科学会の理事としての業務を誠心誠意遂行し、日本手外科学会のさらなる発展のために貢献したいと思っています。引き続きご指導ご鞭撻賜りますようお願い申し上げます。

砂　川　　融

（教育研修委員会、橈骨遠位端骨折診療ガイドライン策定委員会担当）

本年4月の定時総会において理事に選出していただき誠にありがとうございます。広島大学病院整形外科で手外科、肘関節外科、四肢再建外科を担当させていただいております。過去2年間中四国地区からは理事がおらず、地域的な問題もあり再登板させていただいたということで、身の引き締まる思いです。本会は様々な問題を抱えており、この2年間でどこまで解決、進展させることができるか不安なところではありますが、理事会メンバーとして本会が発展するよう尽力させていただきます。

まず、国内的には混迷を極めている専門医制度問題でしょう。諸先輩方が築いてこられた本制度をどうのようにしていくのが会員、そして国民福祉に対する貢献には適切であるのか、また、その先にある「手外科」を標榜科とするためにはどうする必要があるのか、今一度検討する必要があるように思います。次に、本会が発展するためには若手医師を多数リクルートする必要がありますが、整形外科領域では関節外科、脊椎外科が花形であり、多くの若手がそちらに流れているのではないでしょうか。学会として方向性を示すとともに、会員諸兄に「手外科」の魅力を若手に伝える努力をしていただきたいと存じます。

国際的にはどうでしょう。本年はASSHのGuest Nationに選出され多数の本回会員が出席されるものと存じますし、大変喜ばしいことです。先日FESSHに参加しましたが、多彩な世界中の国から多数の個性的な発表がなされ、非常に魅力的で有意義な会でした。最も驚いたのは、来年の会のBoard Memberに韓国手外科学会が入っていたことです。JSSHも積極的に海外に出て協力関係を築く必要性を改めて感じました。

以上、思いつくままに書いてしまいましたが、本会をこらからの世代にとって魅力的な会にし、発展させることが使命と考えております。会員の先生方のご支援を何卒よろしくお願いいたします。

坪　川　直　人
（編集委員会、施設認定委員会、オンラインジャーナル別冊運用委員会担当）

この度は日本手外科学会理事に選出していただき、誠にありがとうございました。前期の2年間では、編集委員会担当理事として正富委員長、谷口委員長はじめ他の委員の先生方と協力し、オンラインジャーナルの充実を目指して参りました。COIを含めた投稿規定の変更、冊子体の日本手外科会誌およびそれ以前の雑誌整形外科掲載分を筑波大学の原先生に御協力いただき、PDF化しオンラインジャーナルに掲載することができました。また施設認定委員会担当理事として、石川委員長はじめ委員の皆様とともに専門医施設の拡大を目指し活動して参りました。オンラインジャーナル別冊運用委員会担当理事としましては委員長の平田先生を中心に、若手の先生方にも参加いただきジャーナルの実現化に向けシステム会社と話し合って参りましたが、諸般の事情からシステム会社と契約が行われず、発刊することができておりません。会員の皆様方にはご迷惑をお掛けし、誠に申し訳ありません。今回理事に再任していただき、前期の3委員会を引き続き担当させて頂くことになりましたので、残り2年間で積み残した課題に取り組んで行きたいと思っております。編集委員会では英語表題、著者名を追加し、英語論文の参考文献への掲載が可能となることを目指しております。これまで投稿論文が投稿規定に外れている場合が多く、査読をしていただく先生方にご迷惑をお掛けして参りました。今後は投稿規定を読んでいるか、また上級医に校閲を受けているかの確認を投稿規定に織り込んでいき、査読の先生方のご負担を軽減していきたいと思っております。施設認定委員会では新しい専門医制度に合った研修施設をどのような形で決定していくかが最大の課題になって参ります。そのためには、現在ある基幹研修病院と関連研修病院の統合編成を行わなければなりません。現在多くの施設が基幹病院となっておりますが、新専門医制度では手外科学会として約50程度の基幹施設が妥当との考えがあるため、基幹病院は各県原則1か所、東京、大阪、名古屋などの大都市圏で2～3か所の基幹施設が妥当となります。基幹病院はその性質から基盤学会である日本整形外科学会、または日本形成外科学会の認定施設であることが求められ、かつ施設条件（病院施設、学会発表、論文作成、指導方法など）がより厳しくなると思われます。基幹病院数、それに伴う関連病院数、地域性など課題は多く、関連委員会と意見交換を行い、新委員長の藤尾先生はじめ、委員の先生方に協力して頂き、在任期間で道筋をつけていきたいと思っております。オンラインジャーナル別冊運用委員会では、システム会社と再度平田委員長、委員の先生方と話し合いジャーナル発

行が可能なのか、日本手外科学会の発展のために必要なのかどうか考えるべき時期に来ていると思います。すべての事業には会員の皆様方の御協力が欠かせません。今後とも宜しくお願い致します。

平　瀬　雄　一
（広報・渉外委員会担当）

この度、日本手外科学会理事に選出していただきありがとうございました。

私の医師生活は慈恵医大形成外科学教室からスタートしました。1982年（昭和57年）のことです。慈恵医大形成外科学教室は丸毛英二先生を中心に慈恵医大整形外科の手の外科班の面々が主体となって設立されたため、非常に整形外科的な形成外科でした。しかし、この極めて整形外科的な形成外科を学んだことが、後の私の医師人生を決定付けることとなりました。

5年後に米国へ留学しました。若くしての留学でしたので医局内には批判的な意見もありましたが、当時、慈恵医大形成外科では停滞していたマイクロサージャリーの技術を学びたくてサンフランシスコのHarry J Buncke（バンキ）先生の門を叩きました。ここでの2年間は私の財産となりました。治療方針や手術方針の立て方、術後のハンドテラピーなど医学的なことだけでなく、医師としての人生のあり方など、そのすべてが私の血となり肉となりました。

帰国後、丸毛教授のご退任にあわせて学位を取得し、続く児島忠雄教授のもとでたくさんの仕事をさせていただきました。私が手外科医として生きていくことになるのだろうという漠然とした予感を抱くようになったのはこのころです。その後、児島先生を追って埼玉手外科研究所（埼玉成恵会病院）へ移り、2010年からは東京へ戻り、四谷メディカルキューブに手の外科・マイクロサージャリーセンターを開設し現在に至っております。

この34年間の実感として思うことは、形成外科医が手外科を診療する機会は増えているのに、手外科医になろうという形成外科医は減っているという現実です。日本手外科学会は日本整形外科学会と日本形成外科学会の2つの学会が支えるsubspecialtyという位置づけですが、日本形成外科学会に真剣に形成手外科医を育成しようという意気込みを感じることは残念ですがあまりありません。手外科を学びたいという若い形成外科医にとって、きちんとした手外科教育を受ける場が少ないという実態もあります。

私が重い腰を上げて日本手外科学会の理事に立候補したのは、このままでは形成手外科医が絶滅するのではないかという危機感ゆえです。アメリカには手外科学会は2つあり（ASSH,AAHS）、それぞれを整形外科と形成外科が主体で運営しています。韓国ではかつて2つあった手外科学会を10年前に統一して整形外科と形成外科から交互に会長をだして一緒に運営しています。豪州では手外科医の半分は形成外科医ですし、欧州では形成手外科医のほうが多いようです。このように手外科には形成外科的知識と整形外科的知識の両方が必要であり、わが国だけが形成手外科医がいなくなっていいはずがありません。形成外科出身の手外科医を多く育てることが、延いては日本の手外科全体の発展につながると信じて、私の日本手外科学会理事としての仕事の中心におきたいと考える次第です。

新名誉会員のご挨拶

日本手外科学会名誉会員に推挙されて

新潟中央病院 形成外科　**柴　田　　実**

この春の学術集会では伝統ある日本手の外科学会名誉会員にご承認頂き誠に有り難う御座いました。

私は故田島達也名誉教授の機能を重視する手の外科に学生時代から興味を感じており、卒業と同時に新潟大学整形外科教室に入局しました。毎週水曜日夜8時からの手の外科検討会は沢山の班員が参加し、深夜まで続く熱気のある会でしたが、私も上越市や会津若松市などの長期出張先からも含めて良く参加しました。折に触れて田島先生の披露される世界の手の外科の情報は刺激的で、いつかは外国で手の外科を研修し、異文化の中での生活をしてみたいと思うようになりました。

卒後9年目に機会を得てアメリカ・ケンタッキー州ルイビルでKleinert Instituteで受けた手の外科、マイクロサージャリーの研修生活で、その後の私の進路が変わる結果になりました。形成外科出身の手の外科医であるLister先生の厳しい手の外科教育と沢山の外国人フェローとの交流はその後の大事な糧となりました。帰国後は再建外科を通じて形成外科領域に通ずる仕事が増えるなか、諸事情で新潟大学形成外科の所属となり、機能と共に整容を重視する手の外科を考えるようになりました。

第53回日本手の外科学術集会を開催させて頂きましたが、慈恵医大 故児島忠雄先生に続いて二度目の形成外科教室の開催学会となり、“手の機能と整容の両立”をテーマに様々な企画を組ませて頂きました。

佐々木 孝 第5代理事長の時に日本手の外科学会が専認構認定の専門医制度を目指すに当たり、手外科は整形外科と形成外科の両基盤学会のsubspecialityである事をそれぞれの学会に認めてもらう事が必要になりました。佐々木理事長初め、担当理事の皆さんとともにいろいろな議論を重ね、両基盤学会の取りまとめに奔走し、専門医制度応募の準備がようやく出来上がりましたが形成と整形の両学会員である身として特別な思いで加わっておりました。今後も両基盤学会が手を取り合って手外科専門医制度充実化に向かっていけるよう、心から願っています。

昨年4月から、大学を離れて一人の手の外科医としてHand fellowの続きのようなペースで仕事をしておりますが忙しすぎる現在の診療体制に少し余裕を持つことも必要ではないかと思っています。今後も手の外科診療を通じて、整形外科と形成外科の研修医、将来手の外科医を志望する若い医師のために少しでも貢献出来ればと考えている今日この頃です。

日本手外科学会名誉会員に推挙されて

山口県厚生農業共同組合連合会 小郡第一総合病院 整形外科　**土　井　一　輝**

この度は、日本手外科学会名誉会員のメンバーに加えて頂き、大変光栄に存じます。日本手外科学会会員になって40年経ちましたが、本会入会当時、いつかは評議員になれるように頑張ろうと同僚と励ましあったことを今でも鮮明に覚えています。しかし、名誉会員にまで上り詰めることができるとは夢想だにしませんでした。先日、ご逝去された広島大学名誉教授 津下健哉先生は私の手外科の恩師であり、津下先生と同じ名誉会員の席に名を連ねることは大変な名誉なことであり、個人的にも大きな達成感を感じております。

1975年に津下健哉先生、生田義和先生の下で手外科、マイクロサージャリー学の研修を開始してから、主にマイクロサージャリーによる機能再建術の仕事を中心に研鑽を行ってまいりました。1986年にメルボルン・セント・ビンセント病院でMr. O' Brienの研修を契機に臨床手外科学の実践教育の重要性を認識し、山口大学、小郡第一総合病院で国内外の手外科研修医を受け入れ、一緒に臨床研究を続けて来ました。この研修医の受け入れは今も続けておりますし、今後も後輩へ受け継いでもらいたいと思っています。研修医に繰り返し教えたことのひとつは、臨床の疑問、成果は必ず記録に残し、学会発表、論文投稿し、レビューを受けることです。これらのことは独善的な診断、治療に自らが陥ることがないように自分自身にも厳しく課してきたつもりです。

日手会では主に教育研修会、専門医制度の仕事に携ってまいりました。手外科実践研修の必要性から始めた研修医の受け入れを日手会全体にも普及しようとしたのが発端でした。教育研修会は、今でも年2回のワークショップも開催し、知識だけなく実技指導も行われているようで安心しています。一方、専門医制度は、元々、手外科教育施設の充実を目的として始めたものでしたが、丁度、学会の法人化に続く専門医認定制度発足の時期と重なり、本来、私が描いた教育中心の制度とは少しかけ離れた方向へ進んでしまいました。これに対して若干忸怩たる思いがありますが、時流として受け入れ、今後の推移を見守っていきたいと思います。

私の座右の銘は、「生涯一外科医」で、プロ野球で監督を務めた方の言葉を捩ったものです。今でも、長時間のマイクロ手術もやっており、4、5年は続けるつもりでいます。老眼にはなりましたが、ルーペや顕微鏡のお陰で視力に不安を感じたことはありません。しかし、老兵がいつまでも現場に留まると若い兵士の活躍の場、経験が少なくなり、将来的に病院の実力が下がってくるのではないかとも考えています。名誉会員の年齢になると、ライフワークの集大成が一般的だと思いますが、未だに新しい疾患の治療、未知の学問への興味が尽きません。「年寄りの冷や水」と言われないようにひっそりと研究しています。その内、新しい論文を発表したいと思っています。

最後に、皆様ご存知の山口県選出の安倍晋三総理のコピーが、私の今の気持ちを最も表現していますのでご紹介して稿を閉じます。

“60 is the new 40.”

日本手外科学会名誉会員に推挙されて

医療法人永仁会 入間ハート病院　**根　本　孝　一**

このたび名誉会員のご推挙を戴きまして大変光栄に存じます。会員の皆様に感謝申し上げます。

私は1976年に慶應義塾大学医学部を卒業し直ちに整形外科学教室に入局しました。手外科班は内西兼一郎助教授と伊藤恵康講師が指導されており、手外科の「いろは」から教えていただきました。学位研究のテーマとして末梢神経障害を与えられ、これは生涯のテーマとなりました。実験的研究では堀内行雄先生の指導を受けました。

1983年に国立栃木病院に赴任し約10年間勤務しました。当時の栃木県には手外科を専門とする医師は少なく、多くの症例が集まりました。済生会宇都宮病院 濱野恭之副院長から持続潅流療法を教えていただき、この方法を手外科領域の感染症に応用しました。山内裕雄教授のご紹介でカナダMcGill大学形成再建外科に1985～1987年の約2年間留学する機会を得ました。McGillでは臨床を見学するとともに、Williams教授の指導のもとに末梢神経の基礎的研究に従事しました。カナダ留学は医学のみならず多くの意味で私の人生観に影響を与えました。1991年にはJOA-AOA Traveling Fellowとして米国・カナダの手外科の中心的病院6か所を見学しました。

1992年に防衛医科大学校に整形外科講師として赴任し手外科を担当することになりました。1998年～1999年にかけて6か月間、英国のSt.James's University HospitalとRoyal National Orthopaedic Hospitalに公務出張しました。Birch教授から末梢神経に関わる多くのことを学びました。2004年に冨士川恭輔教授の後任として整形外科学教授に就きました。手外科は有野浩司准教授・尼子雅敏講師・研究科生・専修医とチームを組んで診療にあたりました。一方、自衛隊衛生に関わる機会が増え、その一環として音楽隊隊員を診察するようになりました。音楽家医学については酒井直隆先生に多くのことを教えていただきました。

2015年4月に第58回日手会学術集会を担当させていただきました。防衛医大整形外科手外科班と慶大整形外科上肢班で合同準備委員会を組織し企画運営にあたりました。学会のテーマは「守・破・離」としました。矢部裕教授をはじめ多くの先生方のご指導ご協力を得て無事開催することができ参加者は1750人を超えました。

私はこれまで多くの秀れた師・先輩・友人・後輩に恵まれました。誠に幸運であり深く感謝するところです。今年3月で防衛省を定年退職しましたが、これからも手外科に携わっていきたいと思います。宜しくお願いいたします。

日本手外科学会名誉会員に推挙されて

聖マリアンナ医科大学 名誉教授　**別　府　諸　兄**

この度は伝統ある日本手外科学会の名誉会員に承認され誠に光栄でございます。

私は昭和50年に東京慈恵会医科大学を卒業後、大学院の2年目に手の外科をまわり故室田景久教授より、手の外科の診断・治療についてご指導を賜りました。昭和56年からUniversity of LouisvilleのKleinert & Kutz Hand Surgery AssociatesにResearch Fellow並びにClinical Fellowとして留学いたしました。この間にTsai先生の指導のもと再接着の実験的研究、腓骨その他の皮弁に関する解剖学的研究など当時の最先端の研究に携わることができました。帰国後は故室田教授、並びに富田、大久保両先生の指導のもとに、慈恵医大整形外科で手の外科、再接着、同種組織移植などの手術に寝食を忘れ没頭していたことが大きな基礎となり勉強となりました。卒後10年目に講師として聖マリアンナ医科大学に移籍し、故三好邦達主任教授のもとで、長尾悌夫教授のご指導で手の外科班を立ち上げました。そして大学院生とともに手関節の解剖学的・生体力学的研究を行い、その後10数名の若手医師を米国に送り出しました。その後、平成17年に講座代表教授となり、教室の責任者として日々努力し、平成27年3月に退任いたしました。

一方、平成2年には日本整形外科学会第1回AOAのTravelling Fellow、平成7年には日本私学振興財団海外派遣で米国Mayo Clinicに短期留学、さらに、平成12年には日本整形外科スポーツ医学会からTravelling FellowshipのGod Fatherとして各国Fellowとともに米国7施設を訪問し、国際的な交流の重要性を肌で感じました。

平成2年に日本外科学会の評議員になり、平成6年度に新設の国際委員会の委員に指名されました。その後、山内裕雄教授、玉井進教授、生田義和教授のご指導を賜り、日・米手外科交換留学制度、日・香港手外科交換留学制度の創設にかかわり、その後APFSSH President、IFSSHのNational Delegateとして国際交流に努力をいたしました。そして、平成24年に聖マリアンナ医科大学整形外科学教室並びに同門会の協力のもと第55回日本手外科学会学術集会を主催させていただき誠に有難うございました。

日本手外科学会は、日本整形外科学会と日本形成外科学会を基盤として、この約30年間に、本学会の国際化、理事長制度の導入、専門医制度の開始、学会の法人化が行われてきました。日本整形外科学会には多くの専門学会がありますが、中でも日本手外科学会は現在まで絶えず先取の考えで、会員の益する方向に向けて努力してまいりました。今後は今まで作り上げた制度を、基盤となる両学会の専門医制度と緊密な関係を維持しつつ見守っていく必要があると思います。

現在は伊丹康人先生の上馬整形外科クリニックの副院長として診療に携わっておりますが、中でも一般テニス選手からプロの選手、ゴルフ、体操の選手などの来院が多く、充実した診療を行っています。また江東区の藤﨑病院では毎週火曜日に手外科外来並びに手術を中心に慈恵医大の先輩である大久保先生と一緒に診療を楽しく行っています。この臨床の合間をぬって、公益財団法人日本股関節研究振興財団の理事長として、事務局の職員達と奮闘しております。何故か大学時代より、慌ただしい毎日を過ごしております。今後ともご指導のほど宜しくお願いもうしあげます。

末筆ではございますが会員の皆様の益々のご健勝とご発展をお祈り申し上げます。

日本手外科学会名誉会員に推挙されて

北海道中央労災病院せき損センター　三　浪　明　男

この度は日本手外科学会（日手会）名誉会員にご推挙いただき大変光栄に存じております。手外科は私にとって自分の整形外科における診療領域の一丁目一番地であり、これまで多くのご高配を頂戴した日手会会員の皆様に心から感謝致します。

私は中村蓼吾先生から日本手の外科学会理事長をバトンタッチされました。この時期は中村先生が創設された日本手の外科学会認定専門医制度（日手会専門医制度）の具体的な肉付け作業を行うことが私の喫緊の仕事でした。別府諸兄先生、土井一輝先生はじめ理事の先生達と頻繁なメールなどのやり取りで何とか今のような形にすることが出来ました。この専門医制度を当時の専門医制度認定制機構（専認構）に認めて貰うために努力したことをよく憶えております。また厚労省に手の外科を標榜科として認めて貰うために佐々木孝先生と厚労省に出向き、手の外科の”の”の字を取らなければとの指導を受け、最終的に評議員会にて現在のように”日本手外科学会”とするように決定させていただきました。多くの先生にとって「手の外科」は大変愛着のある名称でしたので「手外科」とする抵抗はあったと思いますが、決まったときには、今後、さらに専認構で認めた専門医制度となることと日本医学会への分科会としての加盟のための基礎を作ることが出来たと思っております。

もう一つの忘れられない思い出は2年前になると思いますが、日手会定時総会での理事選挙の件です。私が考える手外科のようなsubspecialtyの専門医は整形外科や形成外科など基本診療科の専門医よりもより専門性が高く「この先生のところに行けば手外科領域の疾患については標準的な最高の診療が受けられる」と患者さんが考えて受診する医師であると考えています。以前、日手会専門医制度発足当初に考えていた診療すべき必須領域を削減して現在のカリキュラムとしたわけですが、これで、果たして国民（患者）に胸を張って手外科専門医と言えるだろうかと心配となり、しっかりとした専門医制度を構築し続けて貰いたいとの希望でした。何とか、日手会専門医制度がこれからも患者さんに誇れるものであることを希望しています。

最後にこれからの手外科の先生に考えていただきたいことがございます。手外科は整形外科･形成外科領域の中では1つのsubspecialtyに過ぎません。その狭い診療領域の中で更に細分化している傾向があります。つまりgeneral hand surgeonが非常に少なくなったのではないかと危惧しています。是非、先ほどの手外科専門医の件とも絡めて手外科領域全般の最高の知識と卓越した技術を身につけるように精進してもらいたいと期待しています。

これからの日手会の発展を心から祈っています。まだしばらく現役でおりますのでこれからもご高配のほどお願いします。

新特別会員のご挨拶

日本手外科学会特別会員に推挙されて

東京慈恵会医科大学 医学部 看護学科　**内　田　　満**

この度は伝統ある日本手外科学会の特別会員にご推挙いただきまして、誠に有難うございました。大変光栄なことであり、会員の皆様に厚く御礼申し上げます。

私は1981年に東京慈恵会医科大学を卒業後、同大学の博士課程に進み、1985年に大学院の単位を取得しました。医師になった当初から手の機能と形態の複雑な魅力の虜になり、1983年にモントリオールで開催された国際形成外科学会で、反射による上肢神経系の機能評価について発表し、その内容をまとめた論文により博士号を取得しました。1985年から丸毛英二先生が主任教授を務める慈恵医大形成外科学講座に助手として勤務し、上肢神経系の修復と評価、手の腫瘍および変性疾患の外科治療と術後再建、先天異常の包括的な治療の三つを主たるテーマとして、手外科の研修を積んでまいりました。

慈恵医大の形成外科学講座において、手外科は教室の最も盛んな研究班の一つであり、丸毛先生をはじめ児島忠雄先生、中村純次先生、木下行洋先生、栗原邦弘先生など多くの先生方の薫陶を受けることができたことは、私にとって何よりも幸運なことでした。1982年に日本手の外科学会に入会することができましたが、その年参加させていただいた第25回日本手の外科学会の「手の外科の歩み」が、まだ雑誌整形外科の臨時増刊号として発刊されていたことを思うと、本当に感慨深いものがあります。1988年から2年間の米国留学では、Salt Lake CityのGraham Lister教授のもとで、手の変性疾患および先天異常の治療の研修を行いました。2004年に日本手外科学会の評議員に選出され、学術研究プロジェクト委員会、カリキュラム委員会、その他多くの委員会で学会活動に参加できたことは、大きな喜びでした。

2008年に私は教授として慈恵医大形成外科学講座を担当することになりました。やがて日本手外科学会は一般社団法人となり、様々な変化の中で、形成外科における手外科の存在意義について、多くの場面で改めて考えさせられることとなりました。2012年に日本手外科学会の監事に選出され、新たな専門医制度構築に向けて日本整形外科学会と日本形成外科学会の協力という大きな課題に、役員全員が取り組みました。落合直之先生、矢島弘嗣先生の両理事長が、大人の判断で事態を正しい方向に導いて下さったことは、高く評価されなければなりません。今後日本手外科学会に希望するのは、機能的にも経済的にも健全で適切な情報管理システムの導入と、大きな学会には不可欠である、会員の倫理性を担保するための機構作りです。その二つが実現されれば、医学の中でも特に専門性の高い手外科という分野を擁する本学会は、今後ますます発展を続けていくことができる

と確信しています。私は現在慈恵医大医学部看護学科で、もっぱら教育に携わっていますが、一歩離れた所から日本手外科学会の発展を見守っていきたいと思います。

最後になりましたが、手外科を通してお世話になりました先生方に衷心より感謝申し上げますとともに、会員の皆様方のご健勝を心からお祈りいたします。

◇◇

日本手外科学会特別会員に推挙されて

独立行政法人地域医療機能推進機構 星ヶ丘医療センター 整形外科嘱託医員　**河　井　秀　夫**

平成28年4月、日本手外科学会特別会員に選出された河井秀夫です。

伝統と歴史ある本会の特別会員にご推挙賜り、矢島弘嗣理事長はじめ会員諸氏に感謝致します。

小職、昭和50年大阪大学医学部卒業後、麻酔科や外科研修を4年間行った後、昭和54年大阪大学整形外科学教室に入局致しました。当時の整形外科教授小野啓郎先生のもと、大阪大学整形外科関連病院において整形外科研修を開始しました。日本手外科学会へは昭和57年1月12日付けで入会、手外科については大阪大学整形外科学教室小野啓郎教授や多田浩一講師に薫陶を受けました。今年で手外科入会後、34年の歳月が流れたことになります。手外科入会当時、関西の各大学では手の外科診療が活発であり、マイクロサージャリーを手の外科へ導入した奈良県立医科大学玉井 進教授は国内外で高い評価を受けていました。また京都大学上羽康夫教授が主導され、現在も開催継続中の近畿手の外科症例検討会では直接患者さん診察後、手の外科の診断、治療に関して談論風発、いつも熱い気持ちを感じ刺激を受けたものでした。

大阪大学手の外科グループでは、手の先天異常に関する治療や分類については既に多くの研究業績がありましたが、多田浩一先生が香川医科大学へ異動された後は、露口雄一先生、政田和洋先生、川端秀彦先生と小職など同世代のものが手の外科診療を受け継ぎました。若さと活力ある手の外科診療にしようとお互いに切磋琢磨致しました。当時、モータリゼーションの普及や交通事情の問題等から発生した多くの外傷性腕神経叢麻痺患者さんの紹介を受け、神経外科的再建術に取り組むことができました。分娩外傷による上肢麻痺に対しても、保存的治療とともに早期神経手術による機能再建術の適応を探りました。昭和50年から60年代には腕神経叢損傷に関する研究活動は日本でも活発であり、津山直一先生や小谷 勉先生たちの臨床研究とともに欧州、特にイギリスやフランスなどからも多くの研究論文が報告されていました。フランス語論文も多かったので、悪戦苦闘しながら一語一語辞書を頼りに読み込んでいったことが懐かしく想い出されます。その後、縁あって昭和63年から1年間フランスに留学の機会を得て、パリ10区のサン・ルイ病院Sedel教授のもとで腕神経叢損傷に関する研究を行うことが出来ました。また、腕神経損傷に関しましては、著書(Brachial Plexus Palsy, World Scientific Publishing Co. Pte. Ltd., Singapore, 2000)を上梓致しました。

小職、還暦を境にセカンドジョブとして学校法人四條畷学園に4年間奉職、現在は社会保険診療報酬支払基金大阪支部での医療顧問業務が主たるものになっています。

日本手外科学会では医師としての青春の一時期、手外科の学術活動に参加できましたこと、幸運でした。

今年、65歳、介護保険被保険者証が届きました。ああ、俺もすでに人生の秋を過ごしているのか。介護保険被保険者証を使うことなく、人生の幕が閉じられればいいなと切に願っています。

少年老い易く、学成り難し！(朱熹、偶成)

◇◇◇

日本手外科学会特別会員に推挙されて

熊本整形外科病院 整形外科　**田　嶋　　光**

67歳を過ぎて代議員を退任し特別会員の栄誉にあずかりました。第37回本学会で新評議員に選出され、この間社会保険等委員会、教育研修委員会、専門医制度委員会委員、教育研修カリキュラム委員会委員長、理事(専門医制度、用語委員会担当)を歴任し微力ながらも本学会の運営に関わってきました。

私が学会入会当時"手の外科(当時)"は整形外科内の特殊技能集団的な側面が色濃く好きな者でやっているとの評価の中で、その診断･手術能力、学会発表での喜びを諸先輩、同僚の先生方と密かに共有していた自分が思いだされます。その後手外科の市民社会での認知、卒後研修の確立等が緊要の課題として持ちあがり、法人化獲得と専門医制度の確立が命題となりました。当時専門医制度に関してはその必要性に対しての認識は低く、数人の先輩の先生から強く説かれる中で、ある日私の滞在ホテルの狭い部屋で深夜数時間に渡り、麻生邦一先生、土井一輝先生の3人で缶ビールとピザを食べながら激論したことがつい先日の様に思いだされます。その後専門医制度準備委員会委員に任命されてからは、私の勤務医専門医としての立場から研修カリキュラム委員会の席で議論を重ね、現在の骨格となる研修カリキュラムを作り上げたことが誇りとなっています。手外科が日本専門医機構からsubspecial 専門医として認められ、担当理事として専門医機構の会議に参加する中で100を超すsubspecial専門学会がその組織実態と目指すものが種々であることが分かり、本学会としては2021年の新専門医制での開始に向けてどのように研修プログラムを整備していくのかは大変なことであります。

医師となってからの40年間は研修医時代を除いてほぼ手外科、上肢外科専門医として従事してきましたが、この間の進歩はマイクロサージャリー、関節鏡下手術、骨折内固定法、デピュイトラン拘縮に対するコラゲナーゼ注射等移り変わる走馬灯を見ているようで、遅れることなく必死にくらいついていかないと取り残されそうです。県庁所在地の地方都市での整形外科専門病院の責任ある手外科専門医としては、「それは知らない、それはできない」との一言では済まされない、済ましたく

ない意地と魅力がここまで手外科医にこだわってきた源泉となっています。67歳を過ぎた現在でも現役外科医としての身分を要求されかつ保障され、同僚の常勤手外科医2名、非常勤医2名との日々切磋琢磨する中で、やはり「日暮れて、道遠し」の感があります。

最後に本年の日手会教育研修講演で披歴する予定でしたが、熊本震災のためにかなわなかった指導者としての素晴らしい格言が江戸時代の米沢藩当主上杉陽山によって次のように「見せる！させる！ほめる！」という言葉で述べられています。文章は単純明快ですが、自らに照らし合わせてみても真に意義深い格言で指導者の真髄を表した言葉で、現在の私の心境です。

◇◇

日本手外科学会特別会員に推挙されて

新潟手の外科研究所　**牧　　裕**

日手会の特別会員に推挙していただき大変光栄に存じております。

私が新潟大学の整形外科に入局したのは学生時代に故田島達也先生の熱心な講義が印象的で、当時田島先生が主宰した整形外科医局が活気に満ちていたからでした。昭和62年に新潟手の外科研究所に就職し、所長の吉津先生のもとで手外科の臨床、実験研究などを勉強できたことは幸運でした。平成元年に大学を退官した田島先生が研究所に理事長として来られ、おやめになるまで先生の外来や手術のお手伝いができたこともよい経験でした。

田島先生が灯した「新潟の手の外科」のあかりを消すまいと、もがいてきた感がありますが、田島先生が大学で始められた新潟手の外科セミナーも、その後研究所が主体となって現在まで続けられており、毎年100名以上の受講生があります。また研究所は、新潟大学以外からの研修希望者を、これまで継続して受け入れてきました。多くの方々が地元に戻られ、手外科専門医として活躍され、また日手会でも委員として活動されているのを見るにつけ、私たちの研究所のこれまでの活動が、手外科医を選択した学会員が増えることに微力ながら貢献できているかもしれないと思っています。

私が学会の理事を務めたのは平成23年から26年までの4年間で、主に編集委員会担当理事としての活動でした。前任者の平田先生が学会事務局移転前後に、それまで投稿査読の原稿のやり取りに宅配便を使い、年5冊（抄録集1号を除き）の冊子体学会誌発行に2000万円かかっていたものを、現行のオンライン投稿に替え、さらに印刷所も替えて、コストを1400万円に削減したところでこの事業を引継ぎました。その後雑誌も全てオンライン発刊に替え、コストを1000万円前後に圧縮しました。冊子でなければいらないとか、学会費を返せとまで言う反対意見もあり、抵抗は強かったと思います。しかし今後、新専門医制度や他の新事業を学会が進めるため、学会の事業で最もコストがかかっている学会誌の発刊費用を圧縮することが、限られた学会の予算を有効に使うため必要であると多くの代議員に理解していただきました。現在日手会誌は1巻から抄録号も含め全てオンライン上で閲覧可能となりました。さらにオンライン雑誌上に広告が採れないか平田先生と検討を始

め、アクセス数を高めるため日手会会員以外も閲覧できる別冊の形でオンライン雑誌の準備を始めました。運用方法をめぐりまだ運用を委託する会社との交渉がまとまらず、スタートできない点が心残りです。

新潟手の外科研究所は、平成24年から現在の場所に移転すると同時に、手外科に特化した病院を作りました。既に4年近く経過し、年間3000件近い手術を行いながら、今まで通り研修希望者を受け入れ、マイクロサージャリーの技術指導も行い、手の外科セミナー開催も継続しています。手外科医になりたいと思う人が増えるように、田島先生の御意志を継いだ者の一人として、これからも努力を重ねて行きたいと思っています。

物故会員への追悼文

故 津下健哉先生を偲んで

広島手の外科・微小外科研究所　生　田　義　和

Father of Japanese Hand Surgeryと呼ばれるに最もふさわしい津下健哉先生は、第59回日本手外科学会開催中の広島国際会議場にて、平成28年4月22日の昼前、予定されていた先生の特別講演の直前に怪我をされ、9日後の5月1日に入院されていた広島大学病院にてご逝去になった。

津下健哉先生は、昭和32年7月7日に神戸オリエンタルホテルにて開催された第1回日本手の外科学会の7人の演者の一人としてシンポジストを務められて以来、ほぼ60年にわたり日本の手の外科学会のリーダーとして生きてこられた。この間、手術件数は1万例を超え、広島大学在任中の昭和40年から60年までの間に国内から70名以上、海外から60名以上の外科医が、津下先生の手術を一目見ようと来訪した。

津下健哉先生の医療を、私はほぼ20年にわたり広島大学で身近に学ばせていただいき、大学ご退官後も30年間にわたって広島県立身体障害者リハビリテーションセンターと広島手の外科・微小外科センターでご指導いただいた。この間の先生の新しいアイディアによる手術の数々、膨大な著述などを、言葉でも文章でも事細かには述べる事が出来ませんが、先生独自の発想による新しい術式の一端は、巨指症に対するBarskyの掌側尺取り虫法に対して津下式背側尺取り虫法、フォルクマン拘縮に対するScagliettiの前進法を徹底化した津下変法、示指MP関節の背側脱臼骨折に対するKaplanの掌側アプローチに対する津下背側アプローチ、橈骨神経麻痺に対するRiordanのFCUを尺骨の尺側を回す方法に対するFCRを骨間を通す津下法、肘関節の後側方進入法、それにループ針の開発などである。

また、県立リハセンター在職中に開催された広島手の外科講習会は10年に及び、受講者は1千人を超え、その都度実行されたライブ手術は講義室に生中継され、先生の手の外科は理論ではなく技術であるとの教育理念を徹底された。さらに、広島手の外科・微小外科センターでは手の手術手技を網羅して編纂されたビデオはベストセラーとなった。

このようなご業績もさることながら、昭和40年に上梓された教科書「手の外科の実際」と、昭和60年に出版された「私の手の外科、手術アトラス」は、日本のみならず、世界の手外科の世界にとってどれほど大きな教育的価値があるか計り知れない。前者は平成23年までの46年間に改定7版を数え、後者は平成18までの21年間に改定4判を数え、さらに、アトラスはイタリア語、ドイツ語、英語、韓国語、中国語（異なる二人により2度）に翻訳された。日本はおろか世界の医学書で、これほど多国語に翻訳されたものは無いのではないだろうか。

津下先生の随筆集のひとつである「回顧回想」に、「私の最も輝ける日」として記載されているのは、昭和48年2月にラスベガスで開催された第28回アメリカ手の外科学会の招待講演であるフォルク

マン拘縮の治療の映画は、終わった後のスタンディングオベーションの拍手がしばらく鳴り止まなかったとのことで、その後も多くの国際学会で講演され、平成4年にパリで開催された国際手の外科連合学会では、パイオニア賞を受賞され、平成8年には勲三等旭日中綬章を受章された。

先生の最後は、手の外科に一生をささげられた事の象徴のごとく、手外科学会開催中のステージに倒れられ、94歳の生涯を閉じられた。ご冥福をお祈りいたします。

1985年3月25日　津下先生　広島大学定年御退官の6日前。
大学での最後の手術を終えられた直後。

故 津下健哉先生を偲んで

一般社団法人日本手外科学会 理事長　**矢　島　弘　嗣**

平成28年5月1日に日本手外科学会の生みの親で本学会名誉会員の津下健哉先生が逝去されました。日本手外科学会として津下先生を失うことの意味は、途方もない大きな穴が目の前に急に生じたことだと考えます。おそらく本学会会員の大多数は津下先生ご執筆の「私の手の外科・手術アトラス」をみて、日常の手の手術を行っているものと思われます。津下先生は広島大学の宝（名誉教授）だけでなく、われわれ手外科医の宝、そして神様でもありました。私個人にとってもかけがえのない先生であり、手外科の神様でもありました。そして今回本当に神様になられました。

偶然にも今年は広島で第59回日本手外科学会（4月21-22日）が水関会長のもとに開催されました。会長招宴の時に同じ席に着かせていただき、それが先生とお話しできた最後の機会になりました。翌日の講演の前にお怪我をされ、大学病院に入院されたことを後に知りました。地元広島での学会を最後まで見届けることができなかったことは先生にとっては残念なことであったでしょうが、亡くなられる直近まで多くの手外科の先生方と語り合い、また学会にも参加されたことは振り返ってみて本当によかったのではないでしょうか。私は日本手外科学会役員代表として5月3日の告別式に参列させていただきました。その時のご遺族の方のお話で、津下先生がご遺族に託されていた手紙にあった「私の人生は上出来であった」とのお言葉のご紹介には感動いたしました。そして最後のお別れの時の先生の穏やかな表情は今も目に焼き付いております。きっと広島の学会も成功裏に終わり、安心して天国に旅立たれたのでしょう。

津下健哉先生のこれまでの手外科学と本学会への大きな貢献をあらためて感謝申し上げますとともに、先生のご冥福を心よりお祈り申し上げます。

故 児島忠雄先生を偲んで

児島忠雄先生は平成28年6月24日に84歳で永眠されました。

四谷メディカルキューブ 手の外科・マイクロサージャリーセンター　**平　瀬　雄　一**

児島忠雄先生は慈恵医大整形外科教室に10年、形成外科教室に28年、埼玉手外科研究所（埼玉成恵会病院）に15年間、在籍されました。

慈恵医大形成外科は整形外科内にあった手の外科斑の面々が中心となって作られ、児島先生も丸毛英二教授に従って新設された形成外科学教室へ移られました。

1998年、丸毛英二先生にひきつぎ、2代目の教授に就任されました。在任中は①若い医師の創造性を育てる②関連各科との協力③国際交流の促進、の3つを目標に掲げられ教室を運営されました。とくにご自身は手の皮弁について活発に発表され、いくつもの新しい皮弁が教室から生まれました。また、先生ご自身が開発された逆行性指動脈皮弁はいまや手外科の分野では標準的な治療の1つとなっています。

児島先生が形成外科教授であられた9年間は教室が大きく発展した時期でもありました。506編の論文（うち77編が英語論文）が書かれ、699回の学会発表が行われました。日本形成外科学会をはじめ、多くの学会を主催されました。何よりも形成外科医の会長として初めて第38回日本手の外科学会を主催されたことは特筆に価します。整形外科より遅れること30年後に誕生した形成外科が、日本の手外科の世界でステータスを築けたのは、この学会の開催があったからだといっても過言ではありません。やや在任期間が短かったのがご本人も無念だと言っておられたのですが、教授職だけで終わらないところが児島先生の本領発揮というところでしょうか。

大学を去られた後は埼玉成恵会病院へ移られ、埼玉手外科研究所を創設されました。創設後、数年たってから私と福本先生が合流しました。その頃の児島先生は教授時代を上回るバイタリティーで「目は世界に向けて、足は地域に根ざして、手は患者に差し伸べて」のスローガンのもと、埼玉手外科研究所が一日も早く社会に認められるようリーダーシップを発揮されました。形成外科時代には症例が集まらず困った橈骨遠位端骨折や母指CM関節症などの手外科疾患を思う存分出来る環境にとても興奮しておられ、毎日が本当に楽しそうでした。とくに生涯を通して追及してこられたentrapment neuropathy、手根管症候群への思い入れにはパイオニアとしての意地と誇りを感じずにはいられませんでした。「どんな良いアイデアも論文にしなければ仕方ない」というのが先生の口癖でしたが、80歳近くになっても論文を残そうという先生の意気込みには若いスタッフも脱帽でした。児島先生が所長をされた15年間に219回の学会発表と147編の論文が生まれました。また、在任中にPioneer of Hand Surgeonの称号を国際手外科連合から授与されましたことは私たち弟子一同にとっても大変名誉なことでした。

児島先生に育てられた多くの弟子たちにとって、先生の存在はかけがえのないものでした。仕事に対する厳しさ、科学者としての姿勢、お酒への愛情など、先生の多面なご性格はどれも尊敬に値し愛すべきものでした。私個人は35年間、児島先生のご指導を受けました。不肖の弟子でしたが、

今あるのは先生のおかげと本当に感謝しております。どの弟子も、きっと、みな同じ思いです。どうか安らかにおやすみください。(合掌)

Pioneer of Hand Surgeonをお祝いする会で
埼玉手外科研究所時代のKojima Childrenに囲まれて。

故 Alfred B. Swanson先生を偲んで

名誉会員　山　内　裕　雄

世界の手の外科は今春、Alfred B. Swanson（4月27日、93歳）と津下健哉（5月1日、94歳）という巨星を失った。

津下先生は事故の前日まで矍鑠とされ、日手会広島の会長招宴で矢部 裕名誉会員とともに先生の両隣に席を戴いた私は、先生のさらなるご長命を願って乾杯の音頭をとったものだが、その翌日に・・・。ご冥福を心からお祈りします。

その後まもなく、アメリカ手の外科学会（ASSH）の会員ネットで、お二人の訃報が同じ号に並んで掲載され、葬儀が奇しくも5月3日と同じ日であったことに驚いた。年齢的には天寿を全うされたということではあろうが、この2巨星墜つ、の報に、世代交替の冷厳な現実を感じた。津下先生については生田義和先生が書かれるとのこと。私は私の人生に大きなインパクトを与えてくれたDr. Swansonについて、心からの感謝の念とともに彼の憎めない人間性にポイントをおいて綴ることにする。

私がDr. Swanson（以下親しみを込めて、Alとさせて戴く）に初めてお会いしたのは1957年の冬であった。ミシガン大学付属病院の外科系ローテーションで、彼のいるGrand Rapidsの病院に2ヶ月滞在した。小児系の研修だったので、彼とは職員食堂で時に顔を合わせるだけだったが、背の高いハンサムな青年医師で、凄い整形外科医との評判だった。その後、神戸大整形外科柏木大治教授がたとの交友を通じて、よく来日された。私は東大に戻っていたが、横浜市大での講演後、東大にということで津山直一教授の命で横浜までお迎えに行った。車中、上記のことを話し、It's a small worldということになった。東大で医局長や病棟医長も経験、もう一度外国で今後の道を拓こうという気持でいたら、彼から整形外科のリサーチ主任として来ないかという話が来て、待遇も悪くなかったので、妻子連れで再度ミシガンの地を踏むことになった。

Alはその頃、シリコンラバー（Dow Corning社の商標ではSilastic）によるflexible implantsの開発研究に没頭していた。研究室には防腐加工した屍体があり、それを大いに活用して指関節用のデザイン改良、さらに月状骨・舟状骨・大菱形骨・尺骨遠位端・橈骨頭などの置換用、手関節や肘関節のflexible jointsなどの設計を行った。併せて疲労試験機の設計・実施から術前術後の評価、手術助手、セミナーの準備、AAOSへの学術展示など、大童ではあったが、やりがいのある仕事であり、かなり進捗した。口の悪い友人たちは、Alの脳もじつはシリコン製だと嗤っていた。そこには、誰もやっていない仕事という自負と創造の面白さもあった。この指関節インプラントが、いまだtreatment of choiceとしてRA手再建に用いられているのは嬉しい。これらの仕事のほか、彼がGT AitkenやC Frantzとともに開設したミシガン肢体不自由児協会の小児切断クリニックで見学した小児用義肢開発・交付などの実際は、当時の日本の状態からみれば、まさに眼から鱗の経験だった。図は、AAOS（Chicago, 1968）での“Silastic implants”の学術展示。二人とも若かった。

Alはそれ以外にも、四肢欠損・障害の機能的評価、上肢・手の先天異常の分類などにも大きな業績を残した。彼がよく言っていた言葉：①手術書や論文には手術の真のコツはわざと隠してある、それを読み取れ、②あまり論文を読み過ぎるな、何もできなくなってしまう、があった。いささか極端

かつ逆説的表現でもあるが、誰もやらない独創的な仕事を心がけていたAlの経験から出た忠告として、忘れられない。

日手会学術集会にも第16回（西尾篤人会長）、第23回（森益太会長）。第25回（山内裕雄会長）と3回も招待講演をされている。

彼の手の外科への最大の貢献は、国際手外科学会連合IFSSHの設立にあったと思う。これには彼の脚と心による国際的活躍が基本になっていた。その初期の頃、彼のところにいた私は、役員会にも同席し、諸国の代表たちと交友を深め、それが機縁となって、田島達也先生から数えて日本人としては二人目のIFSSH理事長にして戴いた。その理事会で彼の功績を記念するため、Swanson Lectureshipを理事長提案し、それがSidney学会で実現した。Alは大喜びして、彼から心の籠もった感謝の手紙が届いた。これで永年の恩返しが多少出来たなと私も嬉しかった。

彼はベトナムやペルーへの医療援助にも努力し、晩年は地球的な環境汚染防止のため、植樹運動にも精を出していた。それを冷ややかな眼で見る人たちもいた。でも彼はそんな声は無視し、意に介さなかった。そこに自分の信ずるところ敢然とわれは往く、という彼の勁さを視た。

彼はハンデ2のパワーゴルファーでもあった。ミシガンでの借りを返そうと日本で誘った。彼が一番驚いたのはプレー後の風呂だった。「熱すぎる！オレをボイルする気か！」と、あの日頃「熱いAl」が叫んだ。

Alとの思い出は尽きない。ある日突然、羽田から電話があり、今ベトナムからの帰りだ、今晩お前の家に泊まる、と。やがて大男が大きなスーツケースとともに転がり込んできた。その晩はミシガンで短期過ごした中・小学生の息子たちと大騒ぎした。ワイン庫から勝手に秘蔵のシャトー・ディケムを持ち出してきて、「なんでこんな凄いワインを隠しておくんだ！」といって開けられた。

Al、あの夜のワインは素晴らしかった。いずれそれを1本持って行く。だから、ちゃんと「元気で」天国にいて欲しい。

平成28年度 各種委員会委員

●常設委員会

財務委員会

担当理事	三上容司			
アドバイザー	川端秀彦	小川正則		
委員長	大江隆史			
委　員	内山茂晴	垣淵正男	楠瀬浩一	田尻康人
	西脇正夫			

教育研修委員会

担当理事	砂川　融			
委員長	金谷耕平			
委　員	射場浩介	大野義幸	坂本相哲	島田賢一
	田中克己	中村俊康	村田景一	

編集委員会

担当理事	坪川直人			
アドバイザー	正富　隆			
委員長	谷口泰徳			
委　員	石垣大介	笠井時雄	河村健二	五谷寛之
	佐藤和毅	鈴木克侍	関谷勇人	高原政利
	鳥谷部荘八	長岡正宏	中道健一	西田圭一郎
	西田　淳	信田進吾	原　友紀	藤原浩芳
	堀井恵美子	山下優嗣	横井達夫	

機能評価委員会

担当理事	稲垣克記			
アドバイザー	中村俊康			
委　員	越後　歩	長田龍介	洪　淑貴	多田　薫
	山下優嗣			

国際委員会

担当理事	柿木良介			
アドバイザー	柴田　実			
委員長	和田卓郎			
委　員	面川庄平	金谷文則	佐藤和毅	田中利和
	服部泰典	三浦俊樹		

広報渉外委員会

担当理事	平瀬雄一			
アドバイザー	千馬誠悦			
委員長	白井久也			
委員	磯貝典孝	岡崎真人	佐竹寛史	辻　英樹
	日高典昭			

社会保険等委員会

担当理事	池上博泰			
アドバイザー	高瀬勝己			
委員長	亀山　真			
委員	岩瀬嘉志	島田賢一	代田雅彦	鳥谷部荘八
	光安廣倫	森田晃造		

先天異常委員会

担当理事	亀井　譲			
アドバイザー	川端秀彦			
委員	石垣大介	黒川正人	関　敦仁	鳥山和宏
	中島祐子	橋本一郎		

倫理利益相反委員会

担当理事	酒井昭典			
アドバイザー	塚田敬義			
委員長	根本　充			
外部委員	深谷和子	山我美佳		
委員	重冨充則	普天間朝上	湯川昌広	

学術研究プロジェクト委員会

担当理事	酒井昭典			
アドバイザー	仲沢弘明			
委員長	小野浩史			
委員	釜野雅行	鈴木茂彦	高木誠司	村松慶一

専門医制度委員会

担当理事	稲垣克記			
アドバイザー	落合直之			
委員長	田中克己			
委員	朝戸裕貴	加藤博之	亀井　譲	酒井昭典
	砂川　融	三上容司	矢島弘嗣	

専門医資格認定委員会

担当理事	亀井　譲			
委員長	中尾悦宏			
委員	石河利之	大泉尚美	大谷和裕	加地良雄
	國吉一樹	児玉成人	高木岳彦	鳥山和宏
	野口政隆	松村　一		

施設認定委員会

担当理事	坪川直人			
委員長	藤尾圭司			
委　員	尼子雅敏	岸　陽子	川勝基久	坂井健介

専門医試験委員会

担当理事	加藤博之			
アドバイザー	新井　健			
委員長	佐野和史			
委　員	池田和夫	池田全良	清川兼輔	小林由香
	酒井昭典	田中利和	長尾聡哉	長谷川健二郎
	福本恵三	古川洋志		

カリキュラム委員会

担当理事	田中克己			
アドバイザー	岩崎倫政			
委員長	長田伝重			
委　員	石河利広	加地良雄	松田　健	森友寿夫
	吉本信也			

情報システム委員会

担当理事	池上博泰			
委員長	西浦康正			
委　員	稲垣克記	落合直之	柿木良介	垣淵正男
	加藤博之	亀井　譲	酒井昭典	砂川　融
	田中克己	坪川直人	橋本一郎	平瀬雄一
	三上容司	矢島弘嗣		

用語委員会

担当理事	加藤博之			
委員長	後藤　渉			
委　員	加藤直樹	根本　充	牧　信哉	湯川昌広

●特別（臨時）委員会

Web登録委員会

担当理事	三上容司			
アドバイザー	牧野正晴			
委員長	田尻康人			
外部委員	光岡和彦			
委　員	秋田鐘弼	亀渕克彦	河野正明	西浦康正

定款等検討委員会

担当理事　柿木良介
委　員　亀井　譲　木森研治　平田　仁　藤岡宏幸

橈骨遠位端骨折診療ガイドライン策定委員会

担当理事　砂川　融
アドバイザー　渡邉健太郎
委員長　安部幸雄
委　員　泉山　公　今谷潤也　金城養典　川崎恵吉
児玉成人　清水隆昌　長尾聡哉　仲西康顕
藤原浩芳　三浦俊樹　森谷浩治　門馬秀介

オンラインジャーナル別冊運用委員会

担当理事　坪川直人
委員長　平田　仁
委　員　岩崎倫政　酒井昭典　牧　裕

人工手関節ガイドライン策定委員会

担当理事　池上博泰
委　員　稲垣克記　岩本卓士　酒井昭典　森谷浩治
矢島弘嗣

監事紹介

谷口泰徳　仲沢弘明

教育研修会のお知らせ

◆第22回秋期教育研修会◆

会　　期：平成28年8月27日(土)～28日(日)
会　　場：アクトシティ浜松
主　　管：日本手外科学会 教育研修委員会
詳　　細：http://www.jssh.or.jp/doctor/jp/meetings/instructionalcourse

関連学会・研究会のお知らせ

◆第27回日本末梢神経学会学術集会◆

会　　期：平成28年8月26日(金)～27日(土)
会　　場：大阪国際会議場
会　　長：楠 進(近畿大学神経内科 教授)
詳　　細：http://jpns27.umin.jp/

◆第25回日本形成外科学会基礎学術集会◆

会　　期：平成28年9月15日(木)～16日(金)
会　　場：ナレッジキャピタル コングレコンベンションセンター
会　　長：楠本 健司(関西医科大学形成外科 教授)
詳　　細：http://web.apollon.nta.co.jp/jsprs25/

◆第31回日本整形外科学会基礎学術集会◆

会　　期：平成28年10月13日(木)～14日(金)
会　　場：福岡国際会議場
会　　長：水田 博志
(熊本大学大学院生命科学研究部総合医学科学部門感覚･運動医学講座整形外科学分野 教授)
詳　　細：http://www.congre.co.jp/joar2016/

◆第43回日本マイクロサージャリー学会学術集会◆

会　　期：平成28年11月17日(木)～18日(金)
会　　場：リーガロイヤルホテル広島
会　　長：砂川 融
(広島大学大学院医歯薬保健学研究院応用生命科学部門 上肢機能解析制御科学 教授)
詳　　細：http://www2.convention.co.jp/43jsrm/info/index.html

◆第27回日本小児整形外科学会学術集会◆

会　　期：平成28年12月1日（木）～2日（金）
会　　場：仙台国際センター
会　　長：北 純（仙台赤十字病院副院長・東北大学整形外科臨床 教授）
詳　　細：http://jpoa2016.umin.jp/

◆第29回日本肘関節学会◆

会　　期：平成29年2月3日（金）～4日（土）
会　　場：ホテル日航東京
会　　長：稲垣 克記（昭和大学整形外科）
詳　　細：http://procomu.jp/elbow2017/

編　集　後　記

カレンダーに目を向けると、8月に入り、すでに夏休みである。東京では、猛暑が続き、すでに蝉の声が聞こえてくるようになった。ダムの水位は下がり続け、取水制限が行われている。ところがテレビのニュースでは西の地方の豪雨を伝えている。時の流れは早く、日本は広い。

この時期に発行する日手会ニュース号外版は通常は新任理事の抱負や新名誉会員の思い出話で埋まるのだが、今年は予定外の訃報を3つ掲載することとなった。まずは先の広島での日手会の最中に倒れられた津下健哉先生の訃報で、同じ時期にスワンソン先生の訃報が届き、原稿依頼の締切間近になって児島忠雄先生の訃報が続いた。いずれの先生もまさに日本手外科学会の礎となられた先生方であり、無念としか言いようがない。しかし、On the shoulder of Giantのごとく、先達に恥じぬように私たちは進み続けなければならないと決意を新たにした次第である。

（文責：平瀬雄一）

広報･渉外委員会
（担当理事：平瀬雄一，アドバイザー：千馬誠悦，委員長：白井久也
委員：磯貝典孝，岡崎真人，佐竹寛史，辻　英樹，日高典昭）